

(Lonely Night Gathering)

やのなしい夜の句会報 第236号 (2025.8.24-2025.8.31)

- ◆ 参加者: クイズケ、紺野水辺、石原といき、ひふみや、輪井ゆづ、
宍野(みの)、しまね(くん)、藤一郎、石川聰、沢田大輝、笛地
静恵、山田真佐明、西脇祥貴、ゆうたま、TATSU、西沢葉火、力
オルル、鈴木正口、鈴音、江口ちかる、岡村知昭、塩の司厨長、
季川詩音、冬子、べるほ(い)のるわれた(ぐ)、リコシエ、富永
顯、「アリタ別館、宙ひりり、岩谷浩司、都まなづ、しんいち、
水の眠り、雪平千星、宮坂変哲、ナル、リンネリンク、猫塚れ
おん、古城えい、月詠、suzume suzuki、片羽雲雀、石屋まあく、
ゼロの紙、萬某、霧雨魔理沙、しろじめ、不思議な話のアイ」、
海月漂、山田小太郎、まづけい、Tomoko、雪夜華星、najimi、名
犬 ほち、Yamasaki Radio、わらの扉、非常口ドシト、KAZU、月
波与生 (六〇四)

◆川柳・俳句

- 秋めいて撫でる襟足の髪 紺野水辺
推し事で片眼鏡だけ虹色に クイズケ
アバターは夜ごとサロメの虫刺され クイズケ
におわないスマホので死の国へ クイズケ
冷夏とは土葬の死語を埋めるべし 笛地静恵
オクラから映画館までは一族 石原といき
夏風邪はねつぞうじのひつひみたい 石原といき
団地妻は(い)で深呼吸 みずでっぽう 石原といき
人格を一列に並べて殴る アイン
亀がまだ生きてるパラレルワールド アイン
走りだす心残りの休暇明け 片羽雲雀
過去になる今を並行移動する suzume Suzuki

秋の夜を手に招かざる客がくる 蔭一郎

背中からゑのころぐさが生える虫 蔭一郎

街角を搔湯う汽車に気づかれる 蔭一郎

打ち水の向こう岸からケンケンパ

西沢葉火

フライパン一つで海にできたつけ

西沢葉火

手紙に猿の尾てい骨 西沢葉火

はぐれてもハンバーガーの塾帰り

空野つみき

くるくると樹海へ運ぶレモネード

空野つみき

共食いにならないための隠し味

空野つみき

メルヘンは滅ばない、一口あげる

空野つみき

重心が右脳にあって転ぶ牛

汐田大輝

大概のタカアシガニの脚がない 汐田大輝

汐田大輝

爆心を乳で溶く中島みゆき 西脇祥貴

西脇祥貴

チセキレイチやチチチチと鳴子チチく 季川詩音

季川詩音

俺は色褪せてしまつた扇風機 季川詩音

季川詩音

しめじ食む事後の匂いの人といて 江口ちかる

江口ちかる

ウクレレの穴で始まる秋遍路 しまねこくん

しまねこくん

八月の過ぎる速さが貝の足 しまねこくん

しまねこくん

下ネタを言ひ損なつて虫の音 しまねこくん

しまねこくん

ともだちにならう鯨の顔が好き 力オルル

力オルル

中指にとまらせるなら秋の蝶 力オルル

力オルル

ふと赤ちゃんの匂い胸の奥から 輪井ゆう

輪井ゆう

好きな子が食べた桃から月が出た 山田真佐明

山田真佐明

酔えないの焼きおにぎりはピューリタン ゆうたま

*

コスモスは咲いて誰かの空望む ひいらぎ

ひいらぎ

あじさいのかき揚げ？いいえミイラです 石川聰

石川聰

ムーサよりニーサ奏でる「未成年」 TATSU

TATSU

秋風や團十郎の絆 (しけ)そよぐ 鈴木正巳
真結びで仕舞う八月の記憶を 塩の司厨長
夏シャツや暮れて黄昏時の街 yuto_pachypodium
なにもいらないあなたがそこにいるだけで べんぼっこ
チリコンカン／プラスシャイ 富永顕一

曲名も思い出せずにノイズ焼く アリタ別館
炎暑や庭の花壇の草青む yuto_pachypodium
東京駅へ入れる隠し包丁 しんいち
俺だけを見つめて欲しい扇風機 宮坂変哲
魂が夏の祭りを飛び跳ねる 石屋まあく

過ぎ去つた 日々は決して 戻らない 霧雨魔理沙
パレットに絞り出す青ソーダ水 しろとも

クレヨンを夕焼けにする 海月漂

早朝に秋の気配とされ違い 山田小太郎

猛暑日や猫を写メするお風呂の日 まどけい

オウムガイ背中の時計は明早し 雪夜彗星

オンザロック解除スル目 塩の司厨長

青い目の人になれぬ僕の夏 najimi

大の字と犬の字間違え寝る犬 月波与生

*

◆ 短歌

輪郭のあやしい穴をたどるたび会田誠のドロップキック
水の眠り

ふくろうのような鳴き声もの憂げに夏のおわりを夏のおわ
りを 都まなつ

*

あなたより先に死にたいあなたには傷つかないで暮らして
ほしい 鈴音
ねむれない夜を過ぎこした痕跡をコンシーラーでくまなく隠

す リコシェ

さつきまでどんなに幸禀だったつけ変な名前の眠剤を飲む
宙ひろり

円卓を 囲んで喋り ほろ酔えば 想い出浮かび 唇噛ん
だ 岩谷浩司

喪失を紛らす 25 時お徳用ドーナツ喰らうサトルヌス
雪平千星

膝小僧抱えたボクが見上ぐのはネットちかちかキミへのシ
グナル ナル

秋風が淋しさ連れてやつてくる 残暑にそつとしがみつく
夜 リンネリンク

鍵失くし途方に暮れる秋の暮湿り気の増すエコバッグ提げ
猫琢れおん

窓口で額の汗を拭いつつ誰も知らない夢を数える 古城え
つ

雷鳴が遠くで鳴る しまつた洗濯物が出しつぱなし 振り出
しに戻る 月詠

違う窓から同じ夜へ星を上げ誰かの何かを少し動かす 非
常口ドット

人の波 駆け抜けていく 生きてれば 僕はトンネル あなた
は灯り 萬某

日の沈む時間が早くなつてきて あわてて炊飯ボタンを押
すの Tomoko

◆詩・短文

私の先をゆくものを 許したくない。それを言明するもの
の存在を、確かめたくない。美しいもののあきらめに、た
め息つきたくない。それを徳とするものの証左を、あかし
たくない。あなたが正しく美しく軽やかで可憐であればあ

るほどに、その知性の発露を仰ぐ」との、おそれを殴りた
くなる。それが昔ばなしのように、私の獸性を引き出す大
きな引き金として、ずっとこころを支配している力だ。私
は小さな男だ。あなたは大きな愛だ。（山田真佐明）

◆作品評から

八月の過ぎる速さが貝の足 しまねくくん
（とはいえ九月にこり九月だぞ。名犬 ぱち）

下ネタを言ひ損なつて虫の音 しまねくくん
（わはは。囲炉裏端で、若者たちが盛り上がる。話に参
加したい。怪談。そして、猥談。）だ。しかし、話は次
へ流れる。しまつた。虫の音が、耳に大きく聞こえる。
(笛地静恵)

しめじ食む事後の匂いの人といて 江口ちかる
（いわらの作品のほうが好い、とわたしは思いました。
(Yanasaki Radio)

金色の十一月が舌を出す 汐田大輝

（十一月。秋と冬の端境ゆえに、薄味な印象はぬぐえない。「金色」は散るいちょうでもあり、十一月そのものが
隠し持つ、煌めきでもある。「舌を出す」十一月。薄味
結構、地味結構。自分は自分を貫くまで。十一月からの、
仕返しのあかんべー。（岡村知昭）

あじさいのかき揚げ？いいえミイラです 石川聰
（「ミイラです」で一安心の自分。かき揚げよりミイ
ラのほうが怖いはずなのに。もし「あじさいのかき揚げ」

だと、食べてしまつから？ 食べてからミイラとわかつた
ら、取り返しつかないから？ とにかくミイラと氣づいて
よかつた。あじさいのかき揚げ、食べてみたかつたけど。

（岡村知昭）

いろいろなかき揚げがある中で、なぜアジサイだと思つ
たのか謎です。でも、「ミイラ」というのは本当に何かのミイ
ラでは無くて、何かをミイラにたとえているのかもしれま
せん。アジサイのかき揚げだけれども、見た目がまさにミ
イラである。そう感じました。（季川詩音）

背中からゑのころぐさが生える虫 蔭一郎

（悪夢に出てきそな“化け物” ですな（石原とつき））

ねむれない夜を過ぎした痕跡をコンシーラーでくまなく隠
す リコシェ

（何か悩みがあつて、その気持ちから大切な身体を傷つ
けてしまつた。それを見えないように、周りから心配され
ないようコンシーラーで隠した。強い苦しみを表現して
いると思いました。（季川詩音）

好きな子が食べた桃から月が出た 山田真佐明

（「好きな子が食べた桃から月が出た」。なかなか口マ
ンチックです。給食を思い浮かべました。月＝好きという
暗示とも考えられます。（季川詩音）

つくつくとぼうし派きのこたけのこ派 しまねこくん

（リズムが気持ちいい。「つくつくとぼうしきのこ派たけ
のこ派」じゃないの？（月波与生）

好きな子にぼくはペダルとして飼われ 蔭一郎

（好きな子シリーズその2、「ペダルとして飼う」好き

な子も怖いが、句全体から幸福感が漂っているので「ぼく」はもつと怖い。（月波与生）

森にいる少女はすべて毒キノコ 空野つみき

「毒キノコは華やかで食感も悪くないが後でどんでもないことなる、という読みをさせたくないのであればもう少し工夫がいるかもしれない。」（月波与生）

街角を搔湯う汽車に気づかれる 薮一郎

「現実と非現実が出会った瞬間だと思いました。その汽車自体が何かの命を持っているのか。それとも中に乗っているナニカに気づかれたのか。色々空想が膨らみますね。」（アリタ別館）

中指にとまらせるなら秋の蝶 カオルル

「こんな句、好きですね。中指が良いですね。以外と蝶々止まってくれるのですよね。あれ、言葉が通じるのかななんて思つたことがあります。（さちの扉）

ヘソ曲げてかけ子華やぐカンボジア クイスケ

「かけ子華やぐカンボジア」とはなかなかリズムもいい。いわゆる闇バイトの暗躍のことと想像するがそこは「ヘソ曲げて」で終わり。以下省略の割り切りが面白い。

（月波与生）

江ノ島が見える手前で燃やす手記 汐田大輝

「江ノ島が見えてきた俺の家も近い」は勝手にシンドバットだが、「手記」となるとあの騒がしさとな別な内省的な調べを感じる。江ノ島を見て我に返るのだ。（月波与生）

俺だけを見つめて欲しい扇風機 宮坂麥哲

「夏、というか最近は春や秋も、扇風機が手放せないで
すね。扇風機に恋をしているような感覚になります。「も
うどこに行かないでくれよ」」つて（季川詩音）

フライパン一つで海にできたつけ 西沢葉火

「フライパンの裏に惑星はできる（KAZU）

俺は色褪せてしまった扇風機 季川詩音

「色褪せてしまった扇風機と家出

（蔭一郎）

「色があせてしまって、長い時間が経ってしまったこ
とへの気づきと、何処かしらの後悔感も滲み出でていると思
いました。もうすぐ時期的にまた片付けられてしまう運命
も感じているのでしょうかね…。」（アリタ別館）